

The Rockman memoreal
～Black cat～

シャリル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった大学生は神様の謝罪も含めてロックマンの世界に転生することになった。

けれど、彼はロックマンのことをほぼ知らない…

さて、彼はどう生きてくのでしょうか？

注意！作者自身が漫画の方しか知りません！ので、漫画のストーリーを中心にやります。

目次

| | |
|--------------------|----|
| 一話：何故か死にました | 1 |
| 二話：日常 | 8 |
| 三話：火事!? | 15 |
| 四話：熱斗の所業の悪さというか・・・ | 26 |
| 五話：今日は晶はお休みです | 32 |
| 六話：熱斗の成長 | 37 |
| 七話：WWWの総攻撃！前編 | 42 |
| 八話：WWWの総攻撃！後編 | 48 |
| 九話：束の間の休日 | 59 |

一話：何故か死にました

「……ねえ。何で僕死んだの？」

「いや、そ、それについてはすまないと思っっている。」

白い何も無い空間に僕と白いローブを来た奴がいた。

白いローブを来た奴の顔は見えないものの、声から申し訳ないと思っっているのが感じとれる。

「何で僕？あの変なおっさんじゃなくて何で僕？」

「本当にすまない。私のミスだ……」

けれど、奴のそんな態度を見ても、僕の怒りは鎮まらない。

回想く死ぬ十分前く

今日は母さんが夜遅いため、近所のコンビニで弁当を買っていた。ただ運悪く、強盗に出会った。

「オラア！カネエ！カネ出せや！」

店員を脅して金を集める四十代中ばのおっさん。

何処でどう手に入れたかは知らんが、銃を持っていた。

「テメエらも動くなよお!?動いたらぶっ殺すからなあ!？」

薬でもやっているのだろうか。行動自体もおかしいし、何よりも瞳孔が拡張している。

「ひつく。お母さくん。怖いよ〜。」

人質として、その場に居合わせた客はコンビニの隅っこにビニール紐で縛られていたのだが、隣にいた女の子が今にも泣き出しそうだった。

「ああ!?! うっせえんだよ! ガキ! ダマレや!」

「ひっ」

男に怒鳴り散らされ、収まるも、また泣きそうになったので、「大丈夫だよ。泣かないで。」と声をかけて安心させた。

だって、また泣いたらあれの怒りがこちらに来そうなんだよ

すると、数台のパトカーの音と共にドラマでよく聞く台詞が聞こえた。

「君は包囲されてる! 大人しく銃を下ろしなさい! もう一度言います! 君は「うるせえって言うてんだよ!!」 っつ!?!」

男は警告をしている男―警察官の言葉に苛立ち、銃をこちらに向けた。

…おい。ないだろ。そりゃあ…

そして、先程まで泣いていた女の子を持ち上げ、

「こいつを殺されたくなきや近づくんじゃねえぞ!」

「!!」

女の子の頭に銃口を押し付けた。

「っつ!」

その光景を見た瞬間、僕は理解出来ない行動に出ていた。

いや、理解出来る。

自分にとぼちちりが来ないよう、嘘を言つて落ち着かせたのだ。
なのに、危険な目に会った。大丈夫と言われた先に。

“助ける”と言う言葉が僕を突き動かす。

「があ!？」

男を突き飛ばし、少女を奪還。

これで一安心。そう思ったその次だ。

ドン!

「え……?」

僕の体を勢いよく弾丸が貫いた。

その発射始点を見ると、青ざめた警官が銃を持ったまま静止していた。
うた……れた?

その後、目の前が真っ暗になった。

「まさか君があの子を助けるなんて思わなくて…」

「だからって撃つか？あの時僕が助けてなかったらあの子に当たってたよね？」

「う…」

奴は凶星を突かれたのか、言葉を失う。

「悪い奴を滅ぼすのに犠牲は伴わないってか？」

「…いや、違うんだ。そういう訳ではない。あれが最善の策だったんだ。」

「……はあ？」

「…君に当たった弾丸は、本当は少女の足の腱に当たるはずだったんだ。」

……え？死ななかつたの？え？じゃあ、僕無駄死に……？

「けど、君は彼女を無傷で助け、強盗を気絶させた。だから、謝罪も含めて君に私の管理する世界に転生する権利と、一つだけだけ力を付与するよ？」

……私の管理する世界？…転生？……力…付与？……まさか…

「お前、まさかの神様!？」

「え？そうだよ。言ってなかったっけ？あ、ちなみに私が管理してるのはロックマンの世界だ。」

……ロックマン？

「ナニソレ？」

「…知らない？」

「うん。知らん。けど、なんか面白そうだね。行くかな。？おい。」

神様は呆気にと取られてたらしい。しばらく反応がなかった。

「まあ、行くんだね。わかった。じゃあ、力はどうする？あんまりレパートリー無いけど。」

……あく力か……んん、マンマンが付いてるぐらいだし、戦闘系の世界だよな？うん。あれにしよ。

「じゃあ、ドラゴンで。」

「…え？それでいいのかい？」

「ああ。いいよ。」

「そうかい。じゃあ、楽しんでおいで。」

そう言うと、目の前が真っ黒になった。

二話：日常

はつきり言っておこう。

神様からもらった力が凄い。

いや、僕自身が漫画とかアニメの知識がないせいだから普通なのかも知れないけれども…

まさか身体能力もあるだなんて…

思いもなかったよ…

「攻撃用バトルチップ、ロングソード！スロットイン！」

「く…、これならどうだ！攻撃用バトルチップ、キャノン！」

秋原小学校のインターネット上にて二人のナビがバトルをしている。

一人は全身がほぼ白い、市販の標準型ナビ、α―I型だ。

もう一人は青を基調としたナビ、ロックマン。

「まだまだ詰めが甘いな。熱斗は。」

「くう……まだまだ！」

そのナビをオペレーターする、小学五年の二人。

市販ナビを使う転生者でもある西山晶に、ロックマンのオペレーターである、光熱斗だ。

先程仕掛けたキャノンを躲かし、ロングソードでロックマンの背中を掠める。

「もう一度だ！攻撃用バトルチップ、キャノン！スロットイン！」

「だから甘いと言ってるだろう？サポート用バトルチップ、エリアスチール、攻撃用バトルチップ、ワイドソード！スロットイン！」

市販ナビ、α-1は空高くジャンプし、ロックマンの真正面に着陸。ロックマンの喉元にワイドソードを突きつける。

「く……、ぼ、僕の負けだ。」

「な？まだまだって言っただろ？」

「はあ……これで何回目だよ……晶に負けたの。」

「これで96戦中、96敗だよ。熱斗くん。」

「だあ！言わなくていいっての！」

熱斗はロックマンに怒りながらも嘆く。

て言うかいつの間にか96回もバトルしてたんだか……まあ、今回は少し手こずったし、今度からはもう少し厳し目でやるかな。

そんな感じに次のバトルの事を考えていると、熱斗が羨ましそうに見てきた。

「晶って本当、強いよな。ネットバトラーのラインセンスはあるし。」

「おまけに僕たちナビの欠点をすぐに見つけちゃうし……」

「いや、ただ単に皆の動きが単調過ぎてるだけで、熱斗だつてこれから精進してけば、ネットバトラーのラインセンスだつて貰えるさ。僕だつて越えられるかも知れないよ?」

「ええー? 嘘だろ。それ!」

熱斗は頬をぶくつと膨らませ、違うだろ!と言う。

けど実際、熱斗はロックマンと無意識にシンクロしてる。だから、このまま強くなつていけば、フルシンクロは可能なはず。

フルシンクロはオペレーターがナビを操作、援護する時に出来る命令と行動のズレを無くす。

つまりは一心同体。

あの二人なら、他のネットバトラーより上だ。

まあ、精進してけばの話だけだね。

僕?

気づいたらいつの間にかフルシンクロしていた。

と言うか、最初っからなつた気がする……

と言うのも、初めてバトルした時、α-1の視点で戦ったのを未だに覚えている。

しかも、標準型ナビではあるはずが、威力は申し分ないぐらいの威力。

神様から付与したドラゴンの身体能力がそのまま出ていたのだ。

「さて、もうそろそろお開きだな。」

「えへ。もう一回やろうぜ。つてあー！」

熱斗がいきなり、不味い！と言う顔を見ると、ツカツカと足音が聞こえた。

「そこで何やってるの!?!」

勢いよく扉を開けたのはまり子先生だった。

「まり子先生。おはようございます。朝から元気ですね。」

「あら、晶君。おはようございます。つて、晶君がいるならいいですね…。バトルも程々に…つて…」

そう言つて、熱斗の方へ振り返ると、熱斗が窓から飛び降りていた。

「へ？……ええ!?ね、熱斗！授業は?！」

「俺、早退します!！」

脱兎の如く、熱斗は学校を出た。何でいきなり早退をしたのかはすぐにわかった。

今日は熱斗の父さんが久しぶりに帰って来る日だと。

……そういや、僕の父さんも今日帰って来る日だったような……あ、けど、帰って来れなくなつたとか言つてたな……熱斗のやつ、知つてるのか？

そう思いながら、授業を聞くのだったのだが……

……小学生の授業って、面倒……

大学生だった晶にとっては暇な時間でもあつた。

「ねえ、やいとちゃん。ちよつと、臭くないかしら？」
「な、なんて事言うのっ！レディーに向かつてー！」

熱斗が早退してから少し経った休み時間中、なにやらやいととマイルが騒がしかった。

……確かに焦げ臭いな……

その瞬間、ヂヂヂと言う音と共にパネルが爆発した。

三話：火事!?

原因不明の爆発事故により、学校にいた生徒は全員校舎の外に出た。

「ふう……」

……いきなり爆発したのは驚いたな………つて

「デカオは……?」

血の気が引いた。

まさかと思ひ、周りを見ても、デカオがいない。

「つちー！まだ校舎の中か！」

僕は躊躇なく、燃え上がる校舎に入った。

「デカオー！何処だー！いたら返事しろー！」

……………返事無し！一体デカオ達は何やってるんだ！

「デカオー！何処だー！返事し…うわっ！」

廊下の角を曲がった瞬間、誰かとぶつかった。

「いたたたた……つて晶！」

少し前に早退したはずの熱斗がいた。

「!?熱斗!?何でここに!?お、お前、早退したはずじゃ…！」

「やいとが晶やデカオがいないって言ってたから……デカオは!」

周りを見回し、デカオ達を探す熱斗だが、ここはもう既に僕が探し終えていたので、デカオ達の姿は見えない。

「つつ! 晶! 片っ端から教室見たか!」

「見るわけない……って熱斗!」

こっちの話が終わる前に、熱斗は教室に入っただけだった。

僕も熱斗の後を追いついて、教室に入ると、パネルにフルパワー過熱中、室温56。Cと表示されていた。

「室温56。C!」

「きつと、サーモスタットがウイルスにやられたんだ!! ウイルスさえ駆除できれば、火はおさまるはずだ!!」

「熱斗! ウイルスバスターだ!」

「ああ! 行くぜ! ロック……」

すかさずPETを手に、プラグイン端子をパネルに接続しようとした。

「しまった!! あいつは家に置いて来ちゃったんだ!」

「っな!」

確かによく見ると、熱斗のPETの画面にはロックマンの姿は見当たらない。

「熱斗のバカ！なんでロックマンを置いて来るんだよ！早くネットワークと繋がってるパソコンで、ロックマンを呼び出して!!プラグイン！ライフアル！トランスミッション！」

仕方がないので、僕のナビ（まあ、市販のα-1型だけど）、ライフアルをプラグインさせ、パネル内に入った。

「くっ……い……なんでこんなにいるんだよ！なんぼ何でも多すぎだ！攻撃用バトルチップ、ヒートスプレッド！スロットイン！」

パネル内に入った直後、大量のメットールが襲いかかって来て、現在戦闘中なのだが、やはりメットールはウィルスの中でも弱い。

なので、一撃で倒せれるのだが、今回は数が多すぎる。

ので、攻撃用バトルチップのヒートスプレッドを使用した。

けれど、このヒートスプレッド。

通常では広い範囲に火属性の攻撃するが、何故か僕の場合だけ、威力が10倍にもなっている。なので……………

ボア！

辺り一面火の海になってしまふのだ。

「…………へえ。なんにもカスタマイズもやってねえのにやるなあ…………」

「しかも、さっきのヒートスプレッドじやな。威力全然違うのう？」

「ん？誰だ？」

内心、またやっちゃったなと思っていると、二人組のナビが後ろにいた。

一人はマヨネーズの容器のような形のナビで、もう一人はダルマのようなまるっこいナビだ。

「俺はファイアマン！」

「俺はブレイズマン！」

「ガキ！やろうつてのうか？」

「お主なぞ、丸焼きにするぞい！こやつらのようにな！」

ブレイズマンが後ろを差すと、パネルが現れ、デカ才達の姿があった。

『熱い！熱いよおお！』

『も、もうだめだ!!』

「!!デカオ達っ!今すぐ助けるからっ!」

ギリッと口から音がするのを無視し、二人のナビを見る。

やはり、名前からでも姿からも分かるように、彼らは火を得意とするナビ。ならば、その弱点を付けばいい。

しかし、今回は二対一。

気を引き締めないと!

「攻撃用バトルチップ!アクアソード!スロットイン!」

「へっ!たった一人で俺達を倒そうってかい!やれるもんならやってみな!」

「ふん!蹴散らしてくれるわい!」

あれから数分後

「ファイアアーム!」

「よつと。遅い遅い。」

僕はファイアマンの攻撃をなんなく避け。

「これならどうじゃあ!」

ガキンっ！

「危ない危ないつと、はっ！」

「ぐっ!？」

ブレイズマンが出した剣をアクアソードで受け止め、ブレイズマンのお腹に突きをクリティカルヒットをかます。

「くっ……。こやつ、強い!？」

「ま、まだ大丈夫だ！こつちがまだ有利だ！」

「それはどうかな？」

「!?!だ、誰だ!？」

「お、ロックマン！遅かったじゃないか！」

戦闘に割り込んで来たのはロックマンだった。

『へへ、待たせたな！晶!』

ロックマンの近くのパネルには熱斗もいる。

「遅くなつてごめんね！晶君！つて、ネットナビが二人も!？」

「ああ！今回のこの騒動はこいつらの仕業なんだ！だから、こいつらを倒すせば、火は消えるはず！僕は剣を持つてるナビを相手するから、ロックマンはもう一人の方を！」

「うん！わかった！」

「ふん！一人来たぐらい、なんともないわい！」

「さて、それはどうかな？……攻撃用バトルチップ！パブルスプレッド！スロットイン！」

僕はブレイズマンによく聞こえるように、チップの名前をいい、構えた。

「ふん！そんなもん、当たりもせんわい！はあ！」

ブレイズマンは攻撃が当たらないように、右回りに走ってきた。

「かかったね！」

「何？！き、消えじゃだど?!？」

持ち前の身体能力に物を言わせ、最高速でブレイズマンに近づき、アクアソードで渾身の一撃を放った。

「つな!?パブルスプレッドではない!?どういう……こと……じゃああああ!!!」

最後の言葉を言い終わると同時に、爆発したブレイズマン。

その光景を見ながら、僕はボソツと呟く。

「……………ただのフェイク。口ではパブルスプレッドを。本当は、アクアソードをスロットインしただけなんだけどね。こんな単純な引っかけに騙されるとは、だらしがないなあ。」

生前、既に20歳を越えていたこともあり、子供なら引つ掛かるかなという感じのこ

とを戦闘中にやる僕。

「ただ、大人でも引つ掛かるとは……」

「意外とこの大人にも単純な奴がいるとは。」

「ドコオオオオオオン!!」

「お。あつちも終わったか。」

「ふう……やつぱり、あのナビ達がウイルスを指揮してたんだな。」

「ああ。おかげで火もおさまったし。」

『けど、いったい何者だったんだろう？何が目的だったのかもわからなかったし……』

「火もおさまり、一段落した僕らは、デカオ達と一緒に学校の外に出た。」

「まあ、皆無事だから、いいんじゃない？」

『もう！晶君はマイペース過ぎ！』

「ははっ……確かに！」

「そうか？」

熱斗達は面白そうに笑い、地面に座った。

「ところでさ、ロック……」

「何？熱斗君？」

「？」

いきなり、熱斗がかしこまった感じでロックマンに話しかけた。

しかし、少し照れ臭いのか、なかなか言葉を出さない。仕舞いには。

「なんでお前肝心な時にいないんだよっ!!」

ロックマンに八つ当たり。

ボカッ

「いてえ！何するんだよ！晶！」

そんな熱斗に、お仕置きで一発殴る。

「それは熱斗が置いてったのが悪いだろう？」

「うっ……てか、晶一人でも余裕だっただろう！なんで俺のこと待ってんだよ！」

「……え？マツテマセンヨ？」

目を熱斗から反らし、彼方の方を見る。

「ああ〜！やっぱり！」

「クスクス」

「?メールちゃん?どうしたの?笑って。」

デカ才達と一緒に学校の外に出た熱斗達を見て、ほっとしていたメールは、熱斗達のやり取りを見て、笑っていたのを、やいとに見られていた。

「ああ、いや、晶君と熱斗もロックマンも本当に仲いいなって思ってた。」

「そうね。まあ、熱斗とロックマンはわかるけど、このクラスでも結構大人びてる晶君までと仲がいいなんてね。結構正反対な気がするけど。」

やいととは言葉が終わると同時にウインクし、二人で笑っていた。

「むうっ!絶対晶より強くなってやる!あとロック!いつでも俺の側にいろ!!命令だぞ!」

「なんだよ!熱斗君のいばりんぼ!」

「はは……まあ、頑張れ……」

こうして、今回の騒動がおさまり、家に帰った僕達だが、その後、母さんに怒られた。何故だ……

四話：熱斗の所業の悪さというか・・・

インターネットの少し深い場所。

そこで二人のナビが戦っていた。

ドン　ドン　ドン　ドン

「もう逃げられないぞ！ロックマン！」

「くっ・・・！」

青と黄色を基調としたナビ、ロックマンは、もう一人のナビに追い詰められていた。

「終わったな！俺の勝ちだ!!」

ナビはロックマン目掛けてバルカンショットを打ち放つ。

しかし、それは間違った攻撃だった。

「サポート用バトルチップ、エリアスチール！攻撃用バトルチップ、ワイドソード！」

ロックマンは弾丸の雨から素早く逃れ、空中へ。

「スロトイン！」

ナビの目の前のマスが光り、ロックマンはそのマスに着地。

「な、なにい!？」

「やあああああ!!」

すかさずワイドソードをナビの喉元に向ける。そして、当たる寸前で止めた。

「ま、参った・・・」

ナビは信じられないという顔色で降参した。

「ちえ〜。もう終わりかよ。だらしがねえな〜。」

ロックマンの後ろにある一つのパネルから熱斗が残念そうに言っている。

ロックマンは少し息を切らしている。多分、すぐに回復すると思うが。

「チビの癖になんてえ強さだよ〜もつとハンデくれよ〜」

相手のナビのオペレーターは今にも泣き崩れそうな顔で口論する。

「すげえぞあいつ〜」

「これで十五人抜きだ!」

近くで観戦していたナビは彼らを称賛する。

熱斗はそれで調子に乗ったのだろう。

「へへっさあ!次はどいつだ!?!誰の挑戦でも受けるぜ!」

十六回目のバトルをしようとする。

「熱斗君、まだやるのかい?」

しかし、ロックマンはそれに不満、と言うより、疲れた顔になった。

「熱斗、もうそろそろ止めたほうがいい。ロックマンが疲れてきた。」

現実世界にて、熱斗の隣で観戦していた僕は、口を出した。

「えええ。」

「えええじゃない。ほら、ロックマンも言いなよ。止めようって。」

不満気に口を尖らす熱斗はむうつとしながら、なかなかロックマンをプラグアウトさせない。

少しずつ溜まっていく苛立ちを感じつつ、熱斗にしろと言う。

しかし、それは三回目のプラグアウトの命令を出している最中に終わった。

「みんなあ!! ネットポリスが来るわよお! ネットバトルの取り締まりよお!! 無免許の人は捕まっちゃうわよお!!」

ピンク色を基調とした、女の子らしいナビ、ロールが来たのだ。

「や、やべっ!」

「に、逃げろお!」

当然、熱斗にあつさりやられるほどの雑魚であるので、案の定、逃げていく。

因みに熱斗は僕という許可する人がいるので大丈夫なのだ。

「あきれた。みんな無免許だったのね。」

クスツと笑い、左目をウインクするロール。
熱斗はひきつり、ロックマンは喜んでいた。

「ネットポリスだなんてびつくりしたよ。」

「最近の行いが悪いからじゃないのか？」

「そうそう。ロック君にこんなことばかりさせるからですよ。はい。ロック君。メイちゃんから電子メール預かって来たの。」

「ご苦労様。」

ロールはロックマンに縦長の紙のような物を手渡した。

「何だって？読んでくれよ。ロック。」

内容は

〃熱斗へ

明日は自由研究の発表の日だね。

頑張つてね。

メールより〃

だった。

「・・・そうか、明日か。家に帰ったら、もう一回見直さないと。」

僕は呑気にしながら、面倒臭い作業をしなければと思った。

しかし、熱斗は逆に青ざめていた。

「やばっ・・・すっかり忘れてた・・・何にもやってねえ！」

あたふたと、床に転がり資料を手取る熱斗。

「はあく。熱斗君、いつつもなんだから・・・」

「落ち込まないで！ロック君！」

ため息をつくロックマンを励ましつつ、何故か笑顔なロール。

そこへ一人のナビが現れた。

「ネットナビ同士でイチャイチャしてんじゃねえよ。」

そのナビは少し前に学校にて火事を起こしたファイアマンだった。

しかし、あのナビはロックマンに倒されてデリートされているはずだから、これはバックアップデータから再構築した物だろう。

まあ、しかしこういうのに付き合っていることなど一つもないのは決まっている。

「熱斗。そのの言うことは聞かなくていいからな？じゃあ、僕は帰るね。」

「え？あ、ああ。」

隅っこに待機させておいたライファルを動かし、隠れていたウイルスをデリートし、ログアウトさせた。

ファイアマンの言伝を聞かないで。

次の日、熱斗は来なかった。

ロール曰く、ファイアマンのオペレーターが会いたいからそれに行つたのでは、だった。

・・・あいつ、俺の言つたこと守らなかつたな。よし。次の特訓はいつもより厳しくするか。

次の日、ロックマンが意外な真実を教えてくれた。

熱斗はファイアマンのオペレーターにのせられて、教育庁のデータベースに入つたとか。

馬鹿だろ

もう、その一言しかなかった。

その日、約三時間熱斗に犯罪をやつてはいけないことを、ネットに書いてあつた体験談を元に説教した。

五話：今日は晶はお休みです

ワールドスリー
WWWの小学生洗脳を食い止め、ひよんなことからとんだ拾いもんが見つかった。

まあ、公認ネットバトラーとしてはまだまだだが、これからが楽しみなんだ。

「しっかし、何で今日に限って昌がいないんだか・・・」

「晶君は？」

「父親とパークだとさ。」

隣にいた奴と、少し嘆く。

元々、これは俺達大人がやる仕事何だが、あいつがやるとまたこれがスムーズに終わるんだよな。

頭もバトルもうまいから、だいぶ頼っちまうんだよな。

「やれやれ。」

久々に親父ギャグをしないで、一息つくことにした。

昨日

「ただいま、母さん。．．あれ？父さん。帰って来たの？珍しいね。」

学校から帰ると、いつもいない父さんが帰って来てた。

珍しい。

けど、その事を不思議に思う前に父さんが帰って来たのが嬉しくて、父さんに抱きつく。

「ああ。仕事が早く終わってね。それに、たまには家族とゆっくり過ごしたいからね。

……晶。」

ぼんぼんと、父さんが頭を軽く叩いた。

なんだろうと、父さんの顔を見ると、いつになく、父さんの顔が真剣だった。

しかし、それはすぐに終わった。

「……につ！明日は遊園地に行くぞ！」

「……………へ？……………え？本当!？」

研究のしすぎで疲れている顔を思いつきりにんまりとさせ、僕は中身が大学生なのに、ガツポーズしながら喜んだ。

「良かったよ。晶が喜んでくれて。正直、小学五年で遊園地は嫌かと思ってな。」

「全然だよ！それどころか父さんと思いつきし遊べるから、めっちゃ嬉しい！」

万歳しながら、父さんの悩みに答えを言う僕。

もし、これが熱斗に見られたりしたら、恥ずかしいことこの上ない。

けど、そんなこともほったらかしで喜ぶ。

「そんなに嬉しいのか。父さんも嬉しいよ。……あ、そうだ。晶、この前新しいバトルチップが出来たんだ。良かったら使って欲しい。」

そう言つて、鞆のチップ入れから、バトルチップを取りだし、僕にくれた。

それは、攻撃用バトルチップ、バインドロップだった。

「そのバトルチップは本来はナビを拘束するんだが、それを改良して、拘束した相手を自分の射程距離に引っ張り込むようにしたんだ。どうだろう？晶のナビはカスタマイズはしてなくても、射撃の腕がすごいから役に立つと思うんだ。」

無論、僕はそれに目を輝かせた。

「ありがとう！父さん！」

「ふぐつ……おえ……」

「と、父さん？だ、大丈夫？」

翌日、約束通り家族と一緒に遊園地にやって来た。（無論、学校はサボった。）

が、毎日研究三昧の父さんには、子供の体力の底無しに、参っていた。

何せ、ライファルとフルシンク口でバトルをしていたお陰か、絶叫系のアトラクションばかりに乗っていた。

そのせいで、父さんがダウン。

気持ち悪そうに口を抑え、ベンチに座る。

「あ、ああ。あまり大丈夫ではないが、心配することはない。ほら、父さんの事はいいから遊んで来なさい。」

「はい。」

父さんに心配すると言われ、母さんと一緒にアトラクションに乗りまくった。

『ピロリン』

「ん？メールだ。織田警部補からだ。何々？……へえ……熱斗のネットバトラーの公認試験のシナリオか。……ん……熱斗はすぐに調子に乗るから……テストだって

わからないように進めていくのがいいかな？」

考えながら、熱斗のテストのシナリオを作り、警部補に送った。

「遂に熱斗もネットバトラーか。……楽しくなりそうだな。」

そう言いつつ、僕は絶叫系のアトラクションにチャレンジしに行った。

父さん、西山玄次郎が僕をじつと見ていることに気づかずに。

「……昌、すまん。今は奴らにお前の存在を知られたくないんだ。だから……」

切なそうに、悔しそうに、目を、口を閉じ、ゆっくり、うつすらと口を開け、言った。

「時が来るまで、お前を表には出さない。何があっても……だ。」

六話：熱斗の成長

熱斗が無事に公認ネットバトラーの資格を手に入れた翌日。

久しぶりに織田警部補のいる警察本部に顔を出しに行った。

そしたら、いつの間にか導入されていたレベル30のトレーニングプログラムを炎山があっさり、2・57秒でクリアしていた。

「おっ。いつも通り凄いな。さて、僕もやりますか！プラグイン！ライフアル！トランスマッション！」

さて、ここで一つ問題です。

僕は転生した時にドラゴンの力を神様から付与してもらいました。

まあ、はつきり言えば強力過ぎて、扱いづらいかな。

さあ、そこで僕はどうやってこの力を扱えるようにしたでしょうか？

答えは簡単。

バトルです。

けど、その辺にいるバトラーでは、弱すぎて相手にならず、かと言って、大会に出場

しようにも、その時は公認ネットバトラーの資格を持っていなかったから出来なかった。

だから、そこら辺にいるチンピラを根こそぎ倒して、ついでになんか企んでるなど思った組織を潰したら、公認ネットバトラーの資格を貰えた。

そして、ここにあるトレーニングプログラムを使って本格的に練習を始めたんだけど

……

『ヒートショット』

バーーーーーバン!!

この通り、一秒も経たずにバステイングが終了する。

『クリアタイム0.02秒。バステイングレベル——S』

「ありやいや……今回もすぐに終わっちゃったな。」

「……晶。お前、来なくていいんだぞ?」

織田警部補はため息をつきながら、こちらに来了。

「え?それは酷くないですか?せっかくレベル30のトレーニングプログラムが導入されたって聞いたから来たのに。」

「お前の場合、無意味に近いぞ……それ。」

「そうですね。晶さんはここでトレーニングしても意味ないと思いますよ。現に俺が無

意味でしたから。」

警部補の隣にいた炎山は、警部補がいたにも関わらず、トレーニングプログラムの事を「無意味」と非難していた。

「あはは……無意味は言い過ぎだよ。それと、炎山。同い年なんだし、敬語は止めてつて言ってるんだけど……」

敬語を使われるという慣れないシチュエーションに戸惑う僕だが、炎山はその姿勢を崩さない。

「いえ、何度も言いますが、無理です。第一、同い年でしても、格の違いがありすぎます。」
そう。強すぎたのだ。

公認ネットバトラーとなつて、炎山がオフィシャルに相応しいかバトルを仕掛けて来たのだが、僕が圧勝で勝ってしまったのだ。

「あ、そうだ。炎山。オフィシャルライセンス公認免許を取った三人目のぼうずは知ってるな？」
「……あいつか。」

「ああ、実はあのぼうず、晶にバトルを教えて貰ってるんだとさ。」

「そうですか……つてはあ!?!晶さん!?!何であいつに教えてるんですか!?!」

「え? 駄目? 熱斗とはバトルする度に面白いから教えてるんだけど。」

本当の事を言ったが、何故か炎山はあきれていた。

「……そうでしたか。あの、あいつとバトルしてもいいですか？あいつの器を判断したいんです。」

「え？いいよ？確かに熱斗もここ最近は大御子になりがちだから、ちよつとばかり、鼻を折ってくれると有り難いな。」

（え、えげつないぞ……!?!）

織田警部補がそう思っていたの知らずに、僕は鼻歌を歌っていた。

翌日、熱斗はバトルをしなくなった。

しかも、メイル曰くロックマンとも口を聞いていないだとか。

ま、熱斗はブルース対策にスピードを極めてるんだと思うけど。

そういうやブルースのスピードって、そんなに凄かったっけ？

最初に戦ってからまだ一度も戦ってないな……

今度、バトルしようかな？

その数日後、オフィシャルから任務が来た。

炎山と一緒にメトロラインに行ったが、先客がいた。

ロックマンとガッツマンだった。

いやあ、しかし一度敗北するというのは、いい薬になるなあ。

前にバトルした時より強くなってる。

フルシンクロもしっかり出来るようになってるし。

これからはもう少し厳しめにやってくか。

七話：WWWの総攻撃！前編

ドオン!!

「ひっ!?!」

いきなり、テレビが爆発した。

ビックリして、後ろにバックステップをしてしまった。

「あ、晶!?!大丈夫!?!」

「母さん!大丈夫だよ!それよりコンセントを全部引き抜いて!この爆発、多分ウイルスが原因だ!!それと、危険だから避難所に行つて!」

僕はそう言うのと、家を出て警察本部に直行した。

「晶さん!」

警察本部に着くと、炎山に会った。炎山の話によると、これはワールドスリーWWWが仕掛けた攻撃

で、僕達は対W W Wス^{ワールドスリー}ペシャルチームのチームに組み込まれたらしい。

「……そっか。これはやつらの仕業か。あれ？熱斗は？スペシャルチームに入っていないよ。」

「あいつは、どうやら父親が人質にとられている以上、それが仇になるからチーム選抜から外れたらしいです。」

何か気掛かりがあるのか、引つ掛かりのある顔をしながら炎山はモニターの方を見ている。

……熱斗の父さんが人質……。やつらはいったい何を……。う……。熱斗の事もあるし……

「とにかく、僕達もシルバータワーを目指そう。ま、その前にやることはありそうだけど。」

「？」

首を傾げる炎山をくすつと笑いつつ、警察本部を後にした。

「晶さん！やることってなんですか!？」

「救助活動！都市機能も情報ネットワークもダウンしてるからね！僕達が出来る範囲内でやっておかないと！言っとくけど、レスキュー隊に任せるなんて思ってるなら、助からない人が増えるだけだからね！」

あとは、熱斗に聞きたい事もあるしね！

僕は全速力でシルバータワーに行く道であり、町を通るところで、助けを呼ぶ人々を助けたりしながら、シルバータワーに向かっ行って行った。

すると、案の定熱斗達も救助活動をしていた。

しかし、どうやら苦戦しているようだった。

「プラグイン！ライフアル！トランスミッション！」

「晶?！」

「熱斗！苦戦してるっぽいから参戦しに来たよ！」

すかさずライフアルをプラグインさせ、状況把握をした。

家の中にはやいとちゃんが出て、電脳世界では、ロールちゃんとロツクマンがいた。しかし、ロツクマンはウィルスにやられっぱなしで、攻撃してない。やいとちゃんのだび、グライドもいるが、ロールちゃんを捕まえていた。

しかも、プログラムを書き換えようとしていた。

「!まずい!攻撃用バトルチップ!ソード!スロットイン!」

素早く、ロックマンを攻撃していたウイルスと、グライドの腕を切った。

「腕が!私の腕がああ!」

「え?!ライフアル?!」

グライドの腕を切ったことにより、ロールちゃんは無事救出。ロックマンは予想外の参戦者にビックリしていた。

「大丈夫だったかな?ロックマン。……どうやらグライドはプログラムが書き換えられてるみたいだね。」

「がああああああ!」

「おっと!エレキサークル!」

「ぎやああああ!!」

いきなり襲ってきたグライドを正気に戻すため、バトルチップを使用。ドつと膝から崩れたが、グライドはそのあと正常に戻った。

「無様な戦いだっただな。道理でスペシャルチームに選ばれなかった訳だ。」

「スペシャルチーム?」

「うん。対^{ワールドスリー}WWWの最強バトラーのチームだよ。僕達はこれからシルバータワーに行つて、WWWを叩きのめしに行くんだ。」

「え、ま、待つてくれよ!!^{ワールドスリー}WWWと戦うなら、俺達も……!」

さらつとえげつない事を言いながら、一緒に行こうとする熱斗に質問した。

「熱斗。君は対^{ワールドスリー}WWWスペシャルチームに選ばれなかったのには訳があるんだ。……君は、今友達を盾にとられて攻撃することが出来なかった。しかも敵も本来は友達だった。そんな君が守れるの?自分の父さんを。」

「え!?そんな?!……うそ……だろ……。」

熱斗は驚愕し、顔をあげようとしなない。

そんな熱斗に仕方がないと思つたのだろう炎山は、熱斗の横を通り、シルバータワーに向かおうとした。

「任せておけ。敵討ちぐらいはしてやる。」

ギリツ

熱斗の方から、歯軋りの音が聞こえると、熱斗ががばつと顔を上げ、炎山の方を見た。「ふ、ふざけるな!!へっ、最高の見せ場じゃねえか!!お前にだけいいかつこさせられつかよ!!」

無理やり顔を笑顔にし、炎山に突つかかり、炎山はそれを嬉しそうにしていた。

……やっぱり熱斗は、お父さんや友達を人質に取られたとしても、前を向いて戦うことを決意した。織田警部補は、まだ熱斗とあつてから数日しか経っていないからわかっているのかもしれない。けど、ずっと何年もいたから分かる。熱斗はこんなことで挫けない、強いネットバトラーであるとを。

「さて、したらシルバータワーに向かいますか！ロックマン、ブルース。ライフアルを連れて、科学省の電腦空間に行ってくれ。僕はシルバータワーの入り口から行くよ！」

「おうー！」

「はいー！」

そして僕はシルバータワーに向かい、入口から勢いよく入ったが。

シューシューシュー

「な!? 誰もいない………?」

タワーの中にも、電腦世界にも、誰も居なかった。

八話：WWWの総攻撃！後編

「ど、どうなってるんだ？人っこ一人いないぜ!？」

「…シルバータワーはワールドスリーWWWの奴らがわんさかいるもんだと思ってただけだなあ…。嫌な予感しかないね。これは。」

ワールドスリーWWWによって占拠されていたシルバータワーには誰も居なかった。

たぶん、炎山は気づいているとは思うけど、奴らの計画が武力行使を行わないということは、そのぐらいいまで計画が進んでいる、もしくは—

「遅かったな。」

「ん?」

ビクッ

「だ、だれだ!」

いきなり後ろから声を掛けられ、振り向くと、味方がいた。

しかし熱斗、味方に対して誰だはないよ。

「我々は電腦犯罪課の捜査官だ。そして、そこにいる彼らと同じ対ワールドスリーWWWスペシャル

チームのメンバーだ。」

あ、けど、熱斗はスペシャルチームのリスト見てないからわからないか。

「味方だよ！熱斗君！」

「ふん…。敵と味方の区別もつかないのか？」

「仕方ないだろう!？」

熱斗達のやり取りを見ながら、ふとある事に気づいた。

…ここ、いつもは色んな足音が反響して聞こえるはずなのに、ここにいる人数分の足音しか反響してない。…やっぱり、ここには敵はいないってことになるけど…そんなことはないだろうし…まず、奴らの目的って確か…

『くつくつく…、ネットポリスの諸君、無駄なあがきはやめたまえ!』

いきなり、モニターに変な爺さんが映った。W W Wワールドスリーの総帥、ワイリーだ。

わざわざモニターでこちらに姿を見せ、自分が何をするのかを全て話してくれたのは呆れたが、まずいことがあった。

あと五分もしないで、各主要都市に軍事衛星が一斉攻撃を開始するということだ。

これについてはマジで血の気が引いた。

けど、熱斗はそれを聞いた直後、どこかへと向かった。

そう、シルバータワー50階のブロックE、熱斗の父親の研究スペースであり、

ワールドスリー
WWWが欲しがったあるプログラムがある場所でもあった。

『ネット工学などという下劣でくだらん学問に支えられておる世界など、そのせいでわしが命をささげたロボット工学は蔑ろにされた!だからこそ、わしの学問を否定した世界など、存在する価値はないのだ!!』

いろんな所に設置されたモニターから、ワイリーの狂った戯言を聞かされる。その戯言は、どの人からも狂っているとやられるものでもあり、熱斗も炎山も腹を立てている。まあ、僕にとってはわからなくはない。けど、それだけの理由で世界を滅ぼすなんてのはやり過ぎだ。

「ふざけるな!!そんな勝手な理由で世界を消去デリートされてたまるかよー!」

「ね、熱斗!」

熱斗の父親の研究スペースに着き、ドアを開いた瞬間、熱斗がワイリーに文句を言う。そして、熱斗の父親、光博士は熱斗が来たことに驚いている。まあ、まさか自分の子供が助けるなんて思ってもないだろうしな。

「ふん、部下共に退去を命じる訳だ。…こんな馬鹿げた計画に、たとえWWWワールドスリーの団員でも、黙って従うはずがないからな!」

「小僧ども!貴様らには何も出来ん!出来んのだ!」

「ロック!最終決戦だ!」

「ブルース！ドリームウイルスを破壊しろ！」

「それじゃあ、やりますか！プラグイン！ライフアル！トランスミッション！」

ドリームウイルスがいる電脳空間に行く途中、他のスペシャルチームのメンバーも駆け付けた。

「愚か共め！ドリームウイルスは最強にして無敵！雑魚が何匹群がろうと、かすり傷一つつけることは叶わぬ！」

さて、それはどうかな？

そして、ドリームウイルスのいる電脳空間に着くと、自分達よりでかいウイルスがいた。ドリームウイルスだ。

では、ワールドスリーWWW最後の決戦としますか！

「ロングソード！」

「メガキャノン！」

「続け！一斉攻撃だ！」

デッサンシティ市警察本部

「国防軍より緊急連絡！全軍事衛星が攻撃準備に入っています！」

「デッサンシティ上空にも一基！A国製S―II B型です！」

「こちらでも慌ただしくなり、そして先程のドリームウィルスの攻撃により、大半のナビが消去デリートされてしまったことにより、緊迫した状況になっている。

「残っているのは誰だ!？」

「伊集院炎山のブルース、西山晶のライフアル、チーム己編入のはずの…ロックマンです！」

「な、なんとということでマス！たった11才の少年3人に世界の運命が…!？」

「泣け！喚け！そして絶望するのだ！」

『全軍事衛星へ！一斉攻撃へ秒読ミ開始セヨ！』

何故光博士の研究スペースに？

…彼の研究データのプログラムが彼らの目的の物…？

確か昔見た時の光博士の研究は…あれだったよな…？

ってことは、つまりー

「…もう一度！ヒートプレス！」

もう一度、渾身の一撃を放ち、先程感じた違和感が何かを見つけた。

「…光博士、まさかとは思いますが、あのウイルスが取り込んだのはあの試作段階だった
未完成のプログラムですか？」

「！昌君!?!な、なぜ君がそれを知って?!いや…君は昔、西山博士の仕事を手伝いに来てい
たから知っていて当然か…ああ！取り込んだのはそれだ！」

やっぱりか…

「ふん！何が未完成プログラムだと!?!今更戯言を！ドリームウイルス！奴らに絶望を
！」

「そうはさせないよ？熱斗！ドリームウイルスはドリームオーラで守られてる！外から
の攻撃で倒すことは出来ない。だけど、攻撃を受ける度にほんの一瞬だけ消滅してい
る。復活スピードが早いから何にもないように見えてる

だけだ！」

「け、けどどうやって！」

攻撃を避けつつ、熱斗達に指示を送る。

「フルシンク口を極限まで高めて！そうすれば見れるよ！」

「ナイトソード!……くっ!俺には見えん!」

炎山も試すも、見えていない。そりゃあ極限とは言ったが、そんなすぐには出来ない。が、熱斗は土壇場で力を発揮してくれる。

「やってみる!世界を、未来を、消去デリートさせはしない!」

「炎山!ロックマンを援護するよ!ヒートスプレッド!」

「はい!」

ドリームオーラに対し、攻撃し、そして

フツ…

「今だ!」

ロックマンはドリームオーラが消えたその一瞬のうちに、彼はオーラの内に入った。

僕があるチップを発動させたのを気づかないで。

「ば、ばかな!」

「くらえ!ゼータキャノン!」

僕は熱斗君が入れたプログラムアドバンスを発動させ、ドリームウイルスに攻撃を使

用とする。けど…

スウ…

熱斗君とのシンクロを解いた。

このままでいれば、ドリームウィルスの爆発に巻き込まれて、熱斗君もただでは済まない。

それだけは嫌だ。

だから、だから、消えるのは僕だけでいいんだ。

「ロオオオオオオオック!!」

熱斗君の声が聞こえる。

熱斗君、今までありがとう…、君と出会えて、君と一緒に時を過ごせて、本当に楽しかったよ。

そして、僕はドリームウィルスに攻撃した。

ズドオオオオオオオオオン!

ワイリーがいた場所が爆発し、煙が上がる。

「勝手な…勝手な事しやがって…」

「…っ。」

熱斗はPETをぎゅつと抱き、炎山と光博士は気まずそうにしている。
が、

「ふう…間一髪だったなあ…いやあ、危なかった…。」

「…は？」

僕は、息を切らせながら、ライフアル達をPETに送る。

「何が…何が危なかっただよ！」

熱斗が涙ぐみながら、僕の胸倉を掴んだ。

「昌はまだいいよ…けど、俺はロックが…ロックが…」

『僕がどうかしたの？熱斗君？』

「そっだよ！ロックマンが……って…え？」

「あく…ごめん。熱斗。ドリームウイルスを攻撃した時、オーラ内にいたら絶対に助からないと思って、これ、ロックマンの腰にくくりつけてた。」

状況の読み込めない熱斗達に、苦笑いしながら、あるチップを見せた。

「…バインドロープ？」

「そ！父さんがくれたんだ。本来は敵を捕まえて、射程距離内に引き込むものらしいんだけど、その応用をやってみたんだ。」

九話：束の間の休日

ワールドスリー
WWWの事件から数日がたった。あれからと言うものは、世間では「3人の天才少年」の話で持ちきりになり、熱斗がでしゃばってサイン会を開いてまりこ先生に怒られたり、魚屋のおっさんとバトルしたりと、忙しかった。

熱斗にとってはとても有意義な日々だったらしく、ここ最近熱斗の天狗の鼻が伸びきっている。忌忌しき事態だ。

「と言うことだから、熱斗。良き所に連れてってあげるよ。」

「いや、晶がそう言う時はほぼやべえ所じゃねえかよ。」

ちようど、ロックマンの新兵器、ロックブースターを披露しに来た熱斗達に僕はあることを持ち出す。

「だって、ここ最近はどうやら熱斗は天狗になってて、いつでも寝首が取れる状態になっているのに、何もしないのは駄目だと思うし。」

嫌な顔をする熱斗に、ニコニコ顔で言うど、うゝという感じになった。凶星なのは丸分かりだ。

「うゝ……。あんまし晶の提案には乗りたくはないけど……。」

そう言うことで、僕と熱斗は裏インターネットに行くことになった。勿論、フルシンクろして。

「ここが裏インターネット？」

「うん。あ、そうだ。熱斗、フルシンクろは維持してね。ここは普通のオペレーションは出来ないから、しないと自殺行為になるよ。」

「え、？」

忘れていた裏インターネットでの重要事項を今更ではあるが、さらつと言い、僕は奥に進んだ。

「だから晶の誘いは受けたくねえんだよなあ……。」

ボソツと聞こえた熱斗の文句を聞き流しながら。

「で、晶。」

「ん？」

僕と熱斗は散歩のようにぶらぶらしつつ、襲ってくるウイルスを消去する。デリート

「いつになったらこれ終わるんだよ!？」

だけのはずなのに、何故か熱斗は疲れている。

「たかがウイルスバスティングだよ？熱斗。ウイルスもそれほど強くないし、大量に来たとしても……」

『それは晶（君）だけだ（よ）！』

熱斗とロックマンの声が被った。

「言っておくけどなあ！ここいらのウイルスは裏インターネットにいるぐらいなんだから、普通のウイルスより強いの！」

『しかも、いくつかのウイルスはオーラを纏っているんだよ！』

「そう？ほぼ弱いとしか思わないんだけど。」

必死に色々と喋る熱斗達を見ながら、辺りを見回す。

確かに、こここのウイルスのいくつかはオーラを纏っていた。が、はつきりいえば、ワールドスリーWWWのドリームウイルスより遥かに劣っており、少々強引ではあるものの、オーラごとウイルスを倒すのは難しくはない。

特に、この二人ならば慣れていけば、ほぼ一瞬で終わる。だから、そのぐらいだ。

「さて、熱斗。君はまだまだ弱いし、これから先WWワールドスリーより強い敵が出てもおかしくないのに、こここのウイルスでへばっている。だから、ここでウイルスをほぼ一瞬で倒せるぐらいにまでは……なろうね？」

につこりと熱斗に笑顔で言い、威圧をかけ、熱斗達がコクコクと頭を下げるのを確認した僕はまた裏インターネットを歩き回った。

「さて、だいぶ慣れたと思うけど、どうだった？」

ウイルスバスティングをして三時間ほどだろうか。流石にやり過ぎてしまったようで熱斗とロックマンはだいぶへばっていた。

「……………つ、疲れた……………」

『流石に……ちよつとこれはやり過ぎたよ……』

「ん〜……まあ、最初だからね。そのうち慣れるよ。それに熱斗とロックマンのバスティングも上手くなって来たし。」

最初に来た時はぎこちない動きではあったけれども、今では慣れたお陰でだいぶスムーズにバスティングが出来るようになっていた。

しかし、もっと欲を言えばこのくらいのウイルスは一瞬で蹴散らしてくれる方がいい。

「さて、じゃあ今日はこの位にして帰るか。……あ。」

「?どつかしたのか?……つてうわっ!」

いつの間に来たのだろうか。

気付いた時には熱斗の近くに苦無が飛んできた。

流石に危険だったため、苦無を投げた彼に文句を言った。

「危ないじゃないか。僕はともかくロックマンに当たったらどうするんだい? シャドーマン。」

「そんな軟弱者を連れてくるのが悪い。」

ふんつという感じに腕を組み、シャドーマンは不機嫌そうにこちらを見下している。

「酷いねえ。……それで、何の用だい?」

「なに、久方ぶりに来たと思えば軟弱者を連れて来ている貴様の腕が、どれだけ下がったが見てやろうと思つてな。」

手元に再びシュリケンを持ちつつ、シャドーマンが戦闘態勢に入りだす。

「おやおやそれはとても嬉しい誘いだね。……ロツクマン、危ないから少しの間安全な物陰にいて。」

「こちらでも戦闘態勢に入るために、ロツクマンに安全な場所に行くように指示を出す。

『晶君……わかった。けど、無理はしないでね。』

「ああ。」

心配しつつも、何か言いたげなロツクマンだったが、大人しくでかめの岩陰に行った。

「さて、久しぶりの君との戦闘だ。^{バトル}どのくらい強くなったか楽しませてもらおうかなっ

！」

「っ!?くっ!そう来るか!」

ソードをロードし、そのままシャドーマンに突進すれば、シャドーマンはその場からジャンプし、こちらに向けてシュリケンを放つ。

「おっと。」

そのシュリケンをくるつと回つて躲し、またもやシャドーマンに向かって飛ぶ。

「っ!バクエン!」

すかさず、バクエンを放ち、その勢いでその場から離れ、地面に着地する。

「……。腕は落ちているどころか、また腕が上がっているな……。」

「ふふ。それはどうも。」

にこやかにお礼を言いながら、互いに次の攻撃に移りだす――

「うわあ……。あのシャドーマンってやつ、晶に遊ばれてる……。」

『そうだね。心配して損しちやっただよ。はは。』

晶とシャドーマンが戦闘中、岩陰に隠れて二人の戦闘を眺める熱斗とロックマンは若干どころかかなり引いていた、あきれていた。

「晶って俺らとの対戦中、絶対手加減してるとは思ってたけど、これは……。」

『あの人、見た感じ凄い強そうなのに、晶君、明らかに遊んでるもんね……。』

「しかも絶対晶の奴、あのナビを簡単に倒せるぐらいにはなろうね」とか絶対言うだろう……。」

気まずそうに言いつつ、この後の課題の一つが増えることが予想できた二人は、せめて次の対戦に向けて、二人の戦闘を見ることにした。

『それにしても……いつも思うんだけど、晶君の使うヒートスプレッド、本来ならあんな火力出ないはずなのに、一体どうやって出してるんだろう……。』

「あ、それ俺も気になって、かなり前に聞いたんだけど、秘密って言われたんだよなあ……。』

『意外と謎が多いよね、晶君って。前にブルースと戦った時に言われたけど、晶君、ブルースにも圧勝してたみたいだし……。』

「それに加えてあの炎山の様子だろ？」

『やっぱりかなり強いよね。どうやってあんなに強くなったのか本当に気になるよ。』

「さて、そろそろ終わりにしますか。」

ずっと僕がシャドーマンを追いかけて、シャドーマンは僕から逃げつつ攻撃、そして僕が回避といういたちごっこにより、シャドーマンは息も絶え絶えな状態となっている。

まあ、実際僕自身がシャドーマンで遊んでいたことによるものだが、これでは埒が明かない。だからこそ、次の一手で決着を着けることにした。

「バインドロープ！」

「何!?!」

WWワールドスリーでロックマンを救ったチップ、バイオプロープ。これの本来の使い方は相手を自分の射程距離に引つ張ること。父さんが泣きそうだし、少しはチップ本来の使い方をしないと。

思いつき引つ張って、シャドーマンの喉にソードの先を突き付ける。

「……で、まだやるかい?」

「いや、私の負けだ。まったく、貴様の力は底無しだな。」

手を上げ、降参をしながらシャドーマンはそう呟いた。

「ふふ。君こそ、前と違って隠密とスピードが格段に良くなってるじゃないか。初っ端の君の攻撃が来るまで僕も気付かなかつたし、追いつこうにもすぐ逃げるから追いつくのがめん…ゲフン！追いつくのが大変だったよ。」

にこやかに、また誤魔化しながらソードを下ろす。

「……面倒か。…はあ、まあ、いいだろう。…ああ、そうだ。ここ最近このエリアで『黒い影』がいると噂されている。一応気を付ける。では。」

シャドーマンはそう言うと、裏インターネットの奥に行ってしまった。

「黒い影…確かに面倒だね。出来るなら、会いたくないなあ…。」

そう言いつつ、熱斗達と裏インターネットから帰ることになった。